

# コンビニの 24 時間営業について

---

変化するライフスタイルと現状

京都産業大学・経済学部

菅原研究室

地頭所 祥行 平野 佑樹

若竹 泰行 三上 裕輝

## 要旨

---

近年の不況時でも売り上げを伸ばしている業界がある。それがコンビニ業界である。全国どこにでもコンビニはあり、駅前などでは密集している所もある。誰もがコンビニを1度は利用したことがあるのではないか。

しかしその馴染みのあるコンビニが変わるかもしれない。京都市をはじめとする自治体で、コンビニの深夜営業を規制する動きがある。政策目的としては、環境問題対策や治安の改善などが挙げられている。しかし深夜規制をなされると、売り上げの低下や人々の生活が不便になるなどが挙げられる。

では、どのようにすれば売り上げを向上し、かつ環境保全や治安の改善などを実現できるのだろうか。

そこで、私たちは理論分析として我が京都産業大学の生徒 250 人を対象にコンビニの深夜営業についてのアンケート調査を実施した。その調査結果により少なくとも我が校の学生のほとんどはコンビニの深夜営業を支持し、必要だということがわかった。消費者としての学生たちは「コンビニにはいつでも開いているので、便利。」という意見、また深夜のコンビニ利用の目的でも「飲食物を購入する」という主張がもっとも多い。これは、学生たちはもちろん現代人のライフスタイルが昔と比べて大きく変化し、深夜に働く人たちにとって、コンビニの深夜営業が必要不可欠であると裏付けている。また、女性の意見では、「不審者に遭遇したとき安全だと思う。」といった安全性に関することも出てきた。コンビニで実際深夜にアルバイトをしている学生たちも「深夜はバイト代が良い。」や「その時間にしか働けない。」といった意見が多い。しかし、こういった深夜営業を支持する学生のなかには、「環境に悪い。」や「若者の騒音」といった深夜営業に対して悪い意見も少数あげられている。

そこで、私たちは経済的なプラスの面と環境におけるマイナスの面と表裏一体をなすコンビニの深夜営業について前者後者ともにプラスにできるよう本稿を通して政策を提言していく。

# WEST 論文研究発表会 2010

## はじめに

現在、平成不況 2008 年のリーマン・ブラザーズ破綻により世界的不況に陥った日本では、小売業が悪戦苦闘しているなか、コンビニエンスストア（以下、コンビニ）が健闘していると言っても過言ではない。

コンビニとは商業統計によると、売り上げ面積 50 平方メートル以上 500 平方メートル未満のセルフ店で、営業時間 12 時間以上かつ閉店時刻 21 時以降の小売店をコンビニとして定義している。また日本経済新聞のコンビニ調査では、コンビニは売り上げ構成比率のうち生鮮食品が 30%未満であると定義している。さらに MCR 統計によると、それらに加え広義の食品（酒類・菓子類含む）の店頭売りシェアが相対の 50%以上であること。食品、非食品のうち、どの部分の店頭売りシェアも全体の 60%以下であること。1500 品目以上の最寄性、便利性商品サービスをおこなうこと、などコンビニについて細かく定義してある。

現在全国にコンビニは 43,228 店舗あり、一日に全国で 3500 万人もの人が利用している。コンビニは、1960 年代にアメリカを手本として日本でスタートされた。開業当初は営業時間が午前 7 時から午後 11 時までの 16 時間だった。しかし、1975 年からコンビには 24 時間営業となっていた。

今ではほとんどが 24 時間営業である。コンビニが 24 時間営業に変更した理由としてもっとも有力なのは、高度経済成長によって人々が豊かになり、新しいライフスタイルを築き始めたからである。具体的には、ライフスタイルの変化により夜間に活動する人が増加しているのだ。1970 年では午後 11 時に起きている人の割合が 24%だったのに対し、2005 年は 48%に増加している。そして現在、深夜帯にコンビニを 500 万人もの人が利用している。深夜のコンビニを利用したことがない人は、大都市住居者では 7.4%、その他地域住居者は 11.4%である。この数字により国民の大多数が深夜のコンビニを利用しているということがわかる。

過去 10 年間、小売業全体の売り上げが低迷する中、コンビニの売り上げは約 5 割拡大して売上高 7.9 兆円と、「小売業の王様」と呼ばれていた百貨店をも抜くまでに成長した。（図 1 参照）

その実績は、労働時間や生活時間の多様化と深夜化が主な原因であろう。また、女性の社会進出による共働き家庭も多くなったのもその一つだ。こうした家庭では、一般小売店やスーパーなどの休日増加や開店時間短縮といった消費社会において、深夜営業を行なうコンビニの存在は必要不可欠であると考えられている。このように生活時間の変化と密着に結びつ

ているコンビニは、消費者に「いつでも開いている」「どこにでもある」小売店として受け入れられている。

## 問題意識

# WEST 論文研究発表会 2010

しかし、このような人々のライフスタイルに対応したコンビニにもメリットとデメリットがあり、コンビニの深夜営業に対する是非は賛否両論である。そこで、コンビニの深夜営業について、賛成意見と反対意見を挙げコンビニの深夜営業について賛否を考える。

## 賛成派要素

### 1. 利便性

コンビニは便利である。いや、むしろ便利であるがゆえにコンビニであるといっても過言ではない。コンビニは消費者に『便利』を提供しているのである。深夜営業もその提供される便利の中の一つの要素である。では、コンビニの深夜営業では、どのような事例があるのだろうか。食品・飲料品だけでなく、雑誌や日用品をも置いているコンビニが、深夜時間帯に開いていることは便利であるということにつける。特定のものが急に必要になったとき、急におなかがすいたときにいつでも買いに行くことができるからである。また、現在のコンビニは震災発生時の食料・飲料の提供といった防災面でも非常に役立っている。実際に、阪神淡路大震災や新潟中越沖地震が起こった際にはコンビニが食料等の提供し人々を助けたという事例がある。コンビニがライフラインとして機能したのだ。

また、身近な ATM の拠点や公共料金の納付といった金融機能などの公的なサービスも提供など、いまやコンビニは商品を購入するための場所ではなく、様々なサービスを実施することで、コンビニ=『なんでもできる』というのがテーマとなっているように見受けられる。

### 2. 安全性

深夜間コンビニが開いていると、安全である。コンビニは安心・安全への取り組みについて、全国4万店で「セーフステーション活動」を強化している。これは、防犯訓練実施や深夜の複数人勤務の徹底などである。「セーフステーション活動」の成果事例として、①振り込め詐欺防止②青少年たむろ防止③女性の保護④子供の保護などがある。①のケースは高齢の女性が携帯電話をもって店内 ATM を操作しているのを不審に思ったオーナーが通報。②ケースは深夜の青少年のたむろに対して、コンビニのオーナーが帰宅を促してくれる(年間2.3万件)。このケースについて、コンビニは立地が住宅地に近いことが多く、コンビニ事態が近隣住民に悪影響与えるとの指摘も多数ある。しかし、その一方で心配はないという意見も3割程度ある。青少年へのマイナスの意見が多い中、子供への安全面に対する評価は地域住民からプラスに評価されている。③のケースは女性が帰宅途中不審者につけられていることに気付き、コンビニに駆け込むことができる(年間1.3万件)。このケースでは、直接コンビニの店員に対応を求める事はしないが、身の危険や不安を感じたときに立ち寄れば安全だ

## WEST 論文研究発表会 2010

と考えている人が多いため、コンビニに対する潜在的な期待は大きい。また、開いているだけで安心できる女性も多い。④のケースは児童が遠出をして迷子になりコンビニ駆け込む。職員が保護し母親へ連絡でえきる（年間 0.5 万件）。このように見ると、コンビニの深夜営業は人々の生活に必要なだという事がわかる。

### 3. ライフスタイルの変化に対応

先述したとおり、日本は高度経済成長によって人々の生活は豊かになり、以前と比較すると明らかにライフスタイルが変化している。具体的には夜・深夜間に活動の基点を置いている人が増えているのだ。それは仕事をする人、遊ぶ人、アルバイトをする人など、多岐にわたっている。そういう人々が主に活動する夜間・深夜時間帯には基本的に店は閉まっており、コンビニやファストフード店等しか営業しておらず、買い物を自由にすることができず、生活に支障をきたしてしまふ。そういった現代の社会だからこそ、コンビニの深夜営業に対するニーズはどんどん高まっているのだ。そのため、現代のライフスタイルに対応しているコンビニの深夜営業はなくてはならないものであると言える。

### 4. 雇用の維持

深夜営業をなくすと、まずそこで働いている社員やパートやアルバイトは職をなくします。ほかの時間に働けばいいと思われるかもしれないが、日中は勉強に励む学生や育児におわれる親などはその時間帯でしか働くことができない場合がある。実際に、深夜のコンビニでアルバイトをしている学生に、なぜ深夜のコンビニで働いているのかというアンケートを学生を対象として行ったところ、コンビニの深夜アルバイトをしている人が 10%、さらにその理由について答えてもらったところ、10%の人が『その時間でしか働けないから』と答えました。これは 10 人に一人の割合です。現在 280 万の大学生が日本にいるというのが文部科学省の統計で言われています。つまり、単純に考えると日本全国で 28 万人の学生が深夜でしか働くことができないということになります。学生だけでもその数である。

さらに、コンビニの深夜営業に関わる仕事をしている人にも影響が出ることになる。深夜その店舗へ配達をしている運送業が代表的な例である。昼や夜に配達すればいいと考えるかもしれないが、その時間は道路が混んでいるため時間がかかってしまうリスクがある。そのためガソリン代や人件費が上がりコストが多くかかります。また、コンビニ側からしても、商品の納入や店内の整理、清掃などの作業をするのは利用者の多い昼間よりも、利用者の少ない夜間のほうが遥かに効率もいいのである。

全国で深夜営業をおこなっているコンビニが約 4 万店舗。そのうち深夜帯のコンビニで働く人は 100 万人、またコンビニで扱っているものの製造や配送に携わっている人は 30 万人いると言われています。深夜営業をなくすということは、それらの人々が職にあぶれ

## WEST 論文研究発表会 2010

ることを意味します。以上のような理由から、深夜営業していることにより、助かる人や企業があるのだ。

これらの消費者目線の要素に加えて、深夜営業を廃止してしまうと商品を販売する機会を減らしてしまうことになり、それによって廃棄する商品が増えてしまうという、コンビニ側目線の要素もある。このように見てみると、コンビニの深夜営業は様々な人々の生活に関わっているという事がわかる。

しかし、それらのプラスの要素があればマイナスの要素が存在しているのもまた事実である

### 反対派要素

#### 1. 犯罪数

深夜のコンビニは人通りの少なさや、目撃者が少ないことから強盗・万引きなどの事件が多発している。平成16年以降、コンビニで発生した強盗件数は減少傾向にあるが、深夜時間帯（22時～7時までの間）に発生した強盗は8割程度そのまま、高い水準が続いている。そのため、深夜従業員に対する指導や訓練を実施する必要がある。また警察官の巡回等の必要性も出てくる。そのための指導や訓練に対するコストや巡回等による労働が必要となってしまうのである。

#### 2. 環境に悪い

地球温暖化が騒がれている現在で24時間エネルギーを排出しているのがコンビニだという見方もできる。電気や空調、冷蔵と様々な設備が常時稼働しているためである。それに関連して、多くの見えないコストを生み出していることを指摘する声も少なくない。その例として挙げられるものが二酸化炭素の排出、また地域社会への影響などである。

特に二酸化炭素排出に関しては、近年地球温暖化が国際的に懸念されており、その対処策として締結された京都議定書に温室効果ガス削減の目標値が明記されたこともあって、国民の高い関心があるようである。

また、深夜開いていることで、若者がたむろするようになり、それともなってゴミが増えたり、それらの若者による騒音問題も発生する。深夜であるだけに、一般的には寝ている時間帯であるから、『うるさくて寝られない』などのクレームが店に寄せられているのも現実である。また、深夜営業規制を謳っている京都市では、観光地でもある京都独特の町並み、景観をコンビニが崩すともいっている。

#### 3. 健康面

## WEST 論文研究発表会 2010

これはコンビニで働いている人の健康面に置ける不安要素である。人の身体はそもそも夜寝るように作られているわけであり、それに構わず本来寝ている時間に働いているわけであるから、それが続くことによる精神的または肉体的負担は耐え難いものがある。また、深夜のアルバイトの確保も容易でなく、人件費削減のためもあって、加盟店主や家族で補っている例が多いのが実態である。

こうした状態が5年、10年、20年と継続する結果、実際に健康を害する事態が増大傾向にあるようである。最近の本部への相談の大半は「店をやめたい」というものであり、その主たる原因は、やはり病気である。また精神的、肉体的に家族と接する機会も減り、家族の崩壊につながってしまうのではないだろうか。

### 4. 採算面

フランチャイズ加盟店では基本的にすべての店舗が24時間営業を行わなければならない。そういう契約になっているからである。しかし、それら全ての店舗が、採算が取れているわけではないのだ。深夜に営業していても利用者がほとんどいなく、廃棄や電気代がかさむ一方であるということも存在しているのが現実である。

結局のところ24時間営業のメリットを享受しているのはコンビニ本部であり、そのメリットが加盟店の犠牲によって生み出されているという構図が実態なのである。

実際、深夜の売上が、売上全体の20%以上を占めるという、深夜営業による恩恵を得られている加盟店からでさえも、「やめられるものなら24時間営業はやめたい」という声があるくらいである。これは、先述の健康面の不安に由来している。

以上のように、プラスとマイナスの要素が共存しているのがコンビニの深夜営業の実態である。

## 先行研究

京都市が市内中心部のコンビニの深夜営業を規制することを発表している。今回の規制は景観への配慮、温暖化ガスの削減を目的としている。しかし、実際コンビニの深夜営業をやめたくらいで、温暖化効果があるのかというと、直接的にはあまり効果はなさそうである。

規制に反対している日本フランチャイズチェーン協会の試算では、午前七時から夜十一時までの十六時間営業にした場合のエネルギー消費量と比較すると、せいぜい5-6%減るだけだという。いろいろな相乗効果を含めても未知数というところである。

また、日本フランチャイズチェーン協会の土方清会長は、「コンビニが深夜営業をやめると客離れが起き、20%売上げが落ちます。約8割の店舗が赤字になるでしょう。それはつまりオーナーさんの収入にも響くのです」と説明し、深夜営業中止はコンビニ経営を悪化させるとの意見を述べている。

また広島県呉市もコンビニの深夜営業中止の申し入れを行い、ローソンがいち早く深夜営業を中止することを決めた。ローソンの新浪剛史社長は、「行政による規制には断固反対」

## WEST 論文研究発表会 2010

としながらも、「地域住民の皆様の要望には柔軟に対応したい。新たなビジネスモデルを考える時期」と語っている。

このように、今後規制へ動く自治体が増えていくことは十分に考えられる。

また深夜営業規制という考え方に対して、次のような見解もある。

CO<sub>2</sub>排出に関して、東京大学公共政策大学院のコンビニエンスストア深夜営業規制の費用便益分析の結果、電力消費としては深夜営業を規制することによって約10%削減できることが分かった。よって、コンビニエンスストア全店の深夜営業を規制するのと、10%の店舗減少による二酸化炭素排出削減量は同じである。東京都内にはすでに多くのコンビニが存在し、一店舗の限界便益はそれほど高くない。よって、実現可能性はともかくとして全店深夜営業規制よりも店舗を10%削減した方が、コストは少ないと考えられる。

## 理論分析

以上のように、各地ではコンビニの深夜営業を反対する声が多くなってきているが、どちらの意見を尊重すべきだろうか。その分析をするために私たちは、大学生を対象にアンケートをおこなった。大学生を対象にアンケートを行った理由はコンビニ利用者の年齢層は20代前半の割合が多かったためである。

行ったアンケートでは、まず、一週間のうち3~4回以上コンビニを利用すると答えた人は全体の64%であった。実家通いの学生と下宿の学生で分けてみても、実家通いの学生で週3~4回以上利用すると答えた人は58%、下宿の学生では70%と実家通い・下宿に関係なくコンビニを利用していることがわかる。(図2~4参照)

利用時間帯を見てみると、昼間の時間帯(9時~17時)に利用する人は35%、夕方の時間帯(17時~22時)に利用する人は34%、深夜に時間帯(22時~6時)に利用する人は24%、早朝(6時~9時)に利用する人は8%であった。このことから、深夜の利用者も全体の約1/4を占めていることになる。(図5参照)

次に、深夜での利用頻度を見てみる。先ほどの項目で深夜に時間帯に利用すると答えた人のうち、週に1~2回利用すると答えた人は67%、週に3~4回と答えた人は30%、週に5~6%と答えた人は2%、毎日と答えた人は1%であった。

深夜にコンビニを利用する目的は、ジュースなどの「飲み物買う」が36%、「お菓子をかう」が22%、「立ち読み」が17%、「弁当を買う」が14%と飲食物の購入を目的とした人が70%以上であった。実家と下宿で比べても、目的の割合はそれほど見られなかった。(図6~8参照)

最後に深夜のコンビニに対する印象を見てみる。深夜のコンビニについてどう思うかというアンケートを行った。「いつでもいけて便利」と答えたのが57%で半数をこえています。次に「不審者に遭遇したとき逃げ込めるので安全だと感じる」、「働き口が多くなる」と答えたのがともに12%であった。このことから、80%以上の人が深夜のコンビニにプラスのイメージをもっていることがわかった。(図9参照)

以上により客側からみるとコンビニの深夜営業は、必要だということが分かる。



## WEST 論文研究発表会 2010

では、店側からみるとどうなのだろうか。

1 時間の売り上げ÷働いている人数＝生産性とする。光熱費等を考えないものとする、生産性が 1 人分の時給より大きければ、続けたほうが利益はでる。逆に生産性が 1 人分の時給より小さければ、深夜営業するべきではない。

1 人分の時給は 1000 円が多く、時給が高い人でも 1500 円である。では生産性はいくらなのか。コンビニの深夜帯の 1 時間の平均売り上げは、約 6000 円である。二人で働いているとして、生産性は 3000 円である。生産性が時給より高いため深夜営業を続けたほうが利益が出ることが分かる。

また、仮に深夜営業をやめたとする。すると前述べたように、配達の効率さが下がるため、配達にかかるコストが上がってしまう。また、深夜営業を廃止すると、その時間で行っていた仕事（掃除等）を他の営業時間で行わなければならないため、従業員の労働量が増えてしまう。すると、現在の時給と仕事量が見合わないため辞める従業員が増えてしまう。その対策として、給料を上げなければならない。これでは無駄にコストを上げるだけである。

もうひとつ言えることがある。店を一旦閉めることにより、閉店作業と開店作業が必要になる。閉店作業は閉店後、開店作業は開店まえに行う。そのため従業員は働いているが客は来ないという時間ができてしまう。掃除とレジ閉めという最低限の作業を考えると 30 分かかると思われる。合わせて 1 時間である。するとその 1 時間はマイナス人件費の時間になってしまう。

以上のことから考えると、店側からも深夜営業を続けたほうがよいことが分かる。

これらにより両側からみてコンビニは、深夜営業を続けたほうがよいと分かった。さらに私たちは、さらに深く言えることはないか考えてみた。

では、どこで深夜営業をすればよりよいのだろうか。これを調べるため、先ほどのコンビニの深夜の利用頻度の結果に、実家か下宿かというデータをリンクさせた。そして、どちらが深夜コンビニを利用するのかをグラフ化し、考察した。すると、深夜コンビニを週 1～2 回利用すると答えた実家の人は 69%、下宿の人は 64% である。また、深夜コンビニを週 3～4 回利用すると答えた実家の人は 27% であるのに、下宿は 34% である。（図 10～11 参照）

このことから、下宿の人のほうが多くコンビニの深夜営業を利用していることが分かる。よってそれは、学生が多い場所、学校の近くではコンビニは深夜営業をすべきだということになる。

次に男女によってコンビニの深夜営業に対する考え方が違うのかを知るため、以前に述べたコンビニの深夜営業に対する印象と性別のデータをリンクさせ、グラフ化し考察した。

男性が考える深夜営業の印象は、「便利だと思う。」と答えた人が 59%。「不審者に遭遇したとき安全だと思う。」と答えた人が 11%。「働き口が多くなる。」と答えた人が 15% であった。

一方女性が思うコンビニの深夜営業に対する印象は、「便利だと思う。」と答えた人が 58%。「不審者に遭遇したとき安全だと思う。」と答えた人が 17%。「働き口が多くなる。」と答えた

## WEST 論文研究発表会 2010

人が4%であった。(図12～13参照)

便利だと思う割合は男女ともほぼ同じであった。しかし、安全を重視するのはやはり女性が多かった。さらに驚いたのは、「働き口が多くなる。」と答えた割合の差が大変大きいことが分かった。これは、女性は深夜働きたくないということを意味している。

これにより男女でコンビニの深夜営業に対する求めるものが少し違うということが分かった。これにより、女性が多くいる場所。女子高や女子寮の近く等のコンビニは、深夜の防犯対策や防犯訓練を徹底すべきであるといえる。

次に普段コンビニによく行く人とあまり行かない人の深夜の利用頻度に差はあるか調べてみた。以前使った、「コンビニの利用頻度」と「深夜の利用頻度」をリンクさせグラフ化し考察した。すると利用頻度と深夜の利用頻度は比例することが分かった。(図14～16参照)このように普段コンビニを利用する割合が多い人は深夜もコンビニを利用する割合が多いことが分かる。深夜利用頻度が週1～2回の割合と深夜利用頻度が週3～4回の割合は大きく変化している。

これにより昼間など他の時間でも人が多い場所では深夜営業を続けたほうがよいのではないだろうか。そしてさらにこれはコンビニを多く利用する人(学生や若者)が少ない場所では深夜営業をやめるべきだということになる。

では従業員目線ではコンビニの深夜営業に対する不満はないのだろうか。そこで私たちは従業員に対して従業員目線のアンケートをとった。

深夜コンビニのアルバイトをしている人に、なぜ深夜のコンビニで働いているのかというアンケートをとった。答えは「時給がいいから」と答えたのが67%と一番多く、次に「その時間でしか働けないから」と答えたのが14%であった。(図17参照)やはり従業員からみてもコンビニの深夜営業を必要としているのかもしれない。

さらに従業員に対し、バイト料は見合っているかというアンケートをとった。結果は85%の人が「見合っている」と答えた。(図18参照)これらにより従業員側からもコンビニの深夜営業を必要としていることが分かる。

## 政策提言

以上のようなことから、コンビニの深夜営業は必要である。しかし、深夜営業をするにあたり、雇用の確保や人件費など問題が発生する。各店舗によって条件がまったく違うので、すべての店舗に深夜営業を強制すると店の経営管理にも影響が出てしまう。しかし、深夜営業を自主的にやめようとするフランチャイズ本部との契約違反になり違約金数百万円を払わなくてはならないという決まりがある。その契約上では、15年間は24時間営業をしなければならないことになっている。そこでフランチャイズ本部と各店舗との関係を見直すことで、深夜営業の店舗を減らすことも可能であろう。現在のフランチャイズ各店は、深夜営業をしたくないと考えていても本部との契約上、行わなくてはならない。これは、本部に入るロイヤリティが利潤ベースではなく、粗利益高ベースであるためである。つまり本部からすると、深夜営業が人件費等によって赤字であったとしても売上が出ていれば収入が増える仕組みである。実際に、フランチャイズ各店では深夜営業をやめたいという声が多数ある。よって、深夜営業の強制という契約の禁止等を行えば、全国的には深夜営業をやめる店が出てくるだろう。しかし、そういった店は深夜の売上が悪いと考えられるので、深夜営業がなくなったとしても社会的コストはさほど発生しないと思われる。したがって、全店舗に対して深夜営業禁止の規制をかけるのではなく、各店舗が自主的に営業するかしないかを判断できるようにする政策を提案する。

# WEST 論文研究発表会 2010

## 【参考文献】

### 《先行論文》

東京大学公共政策大学院 経済政策コース

「公共政策の経済評価」 2008 年度

牛田 遼介(学籍番号088089)

勝本 大二朗 (学籍番号078014)

森田 俊(学籍番号088115)

安田 慎(学籍番号 088116)

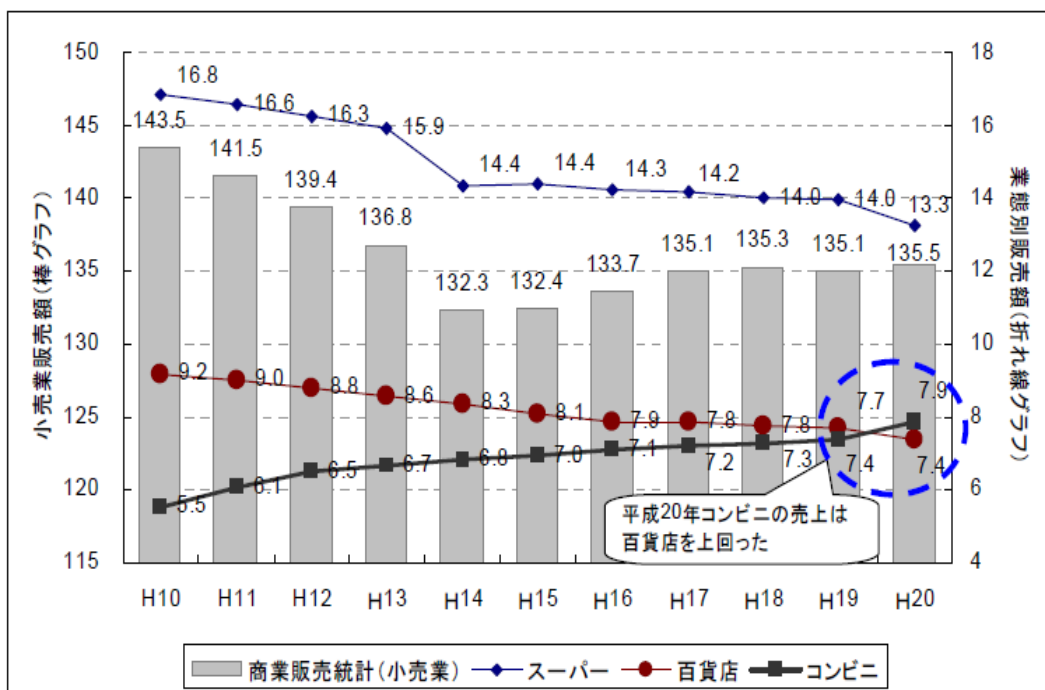
藤田 梓 (2009 年) コンビニの深夜営業について。

### 《データ出典》

日本フランチャイズチェーン協会 HP <http://www.jfa-fe.or.jp/>

NHK クローズアップ現代 12 月 11 日放送

図表 1 過去 10 年間の小売業の売上げ推移 (単位：兆円)



# WEST 論文研究発表会 2010

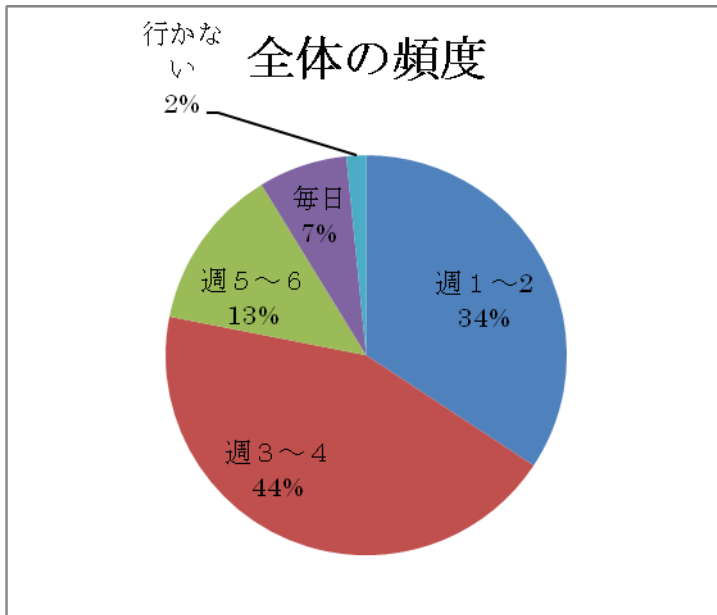


図 2

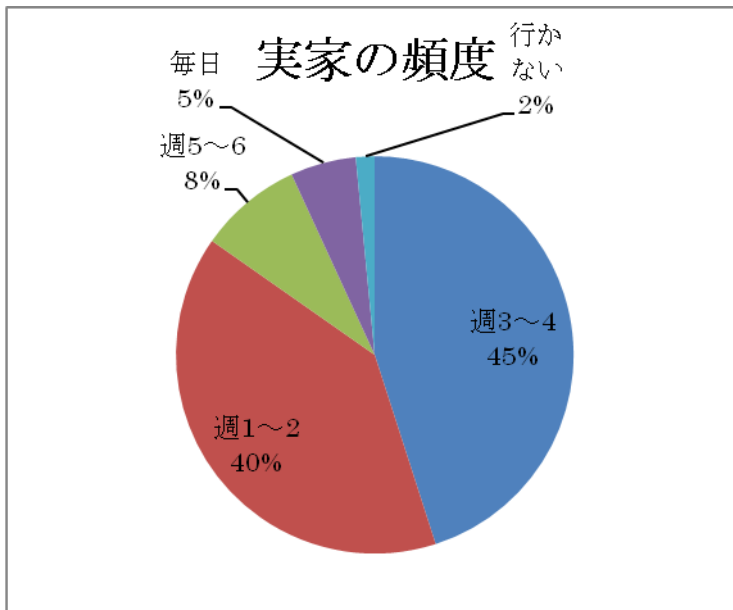


図 3

# WEST 論文研究発表会 2010

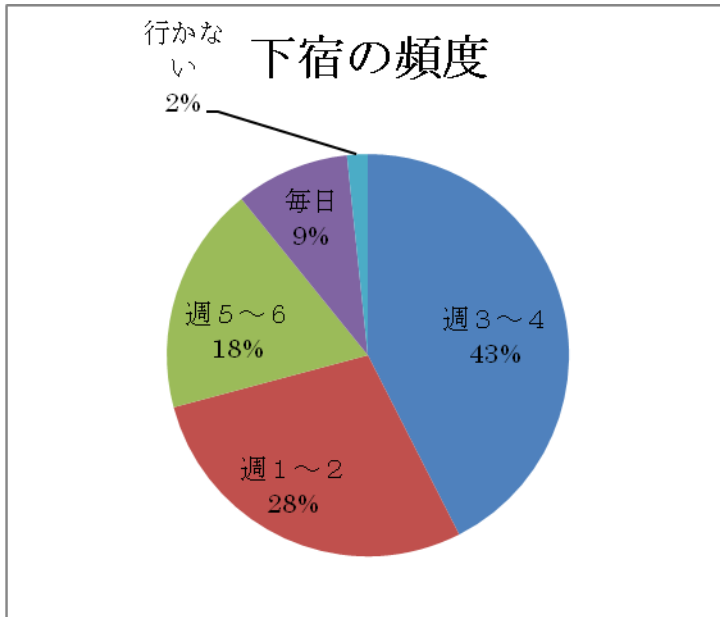


図 4

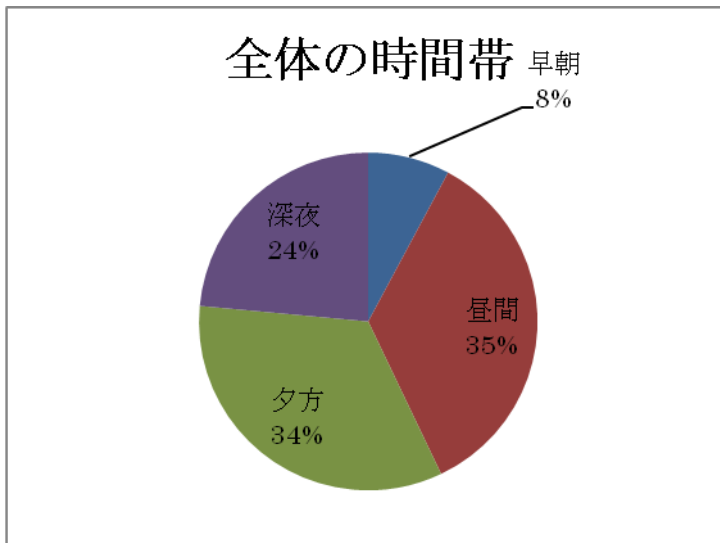


図 5

# WEST 論文研究発表会 2010

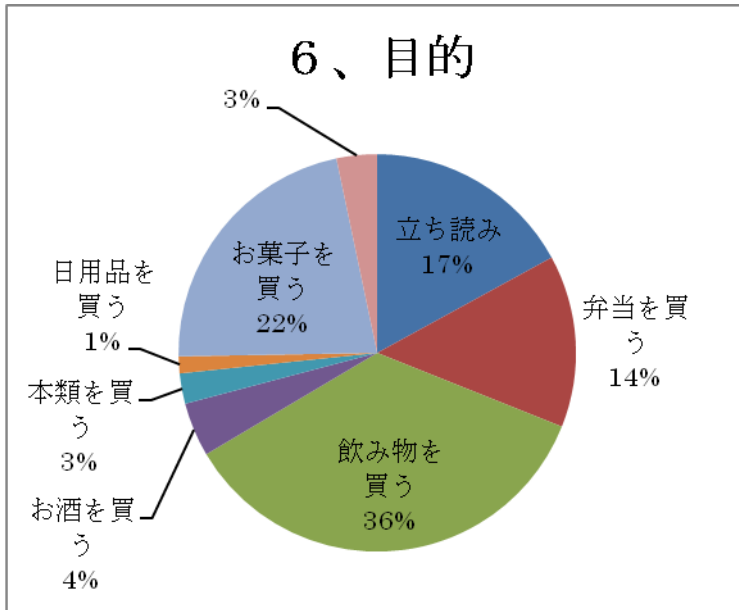


図 6

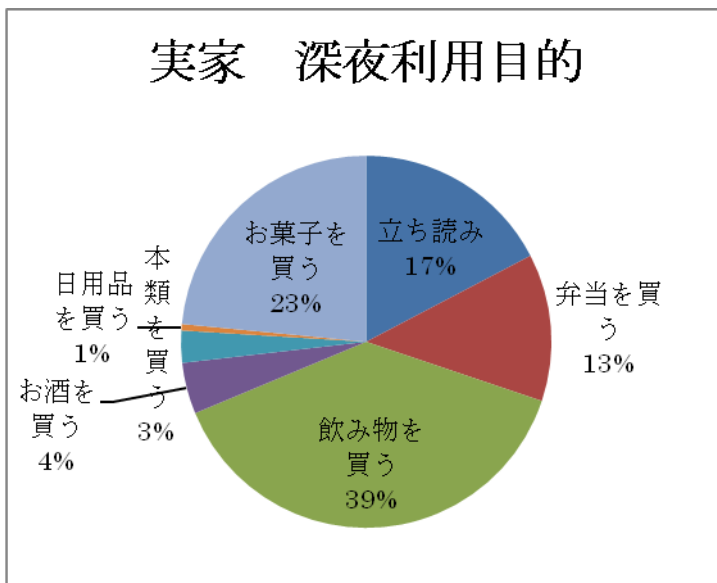


図 7

# WEST 論文研究発表会 2010

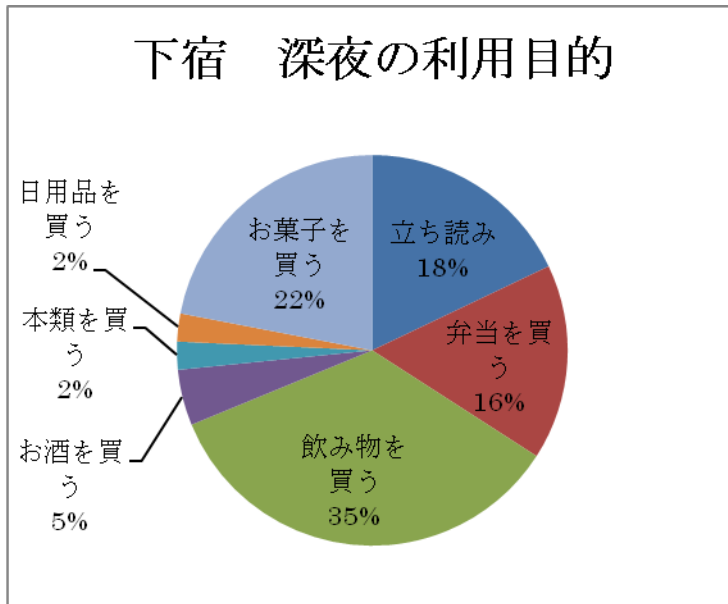


図 8

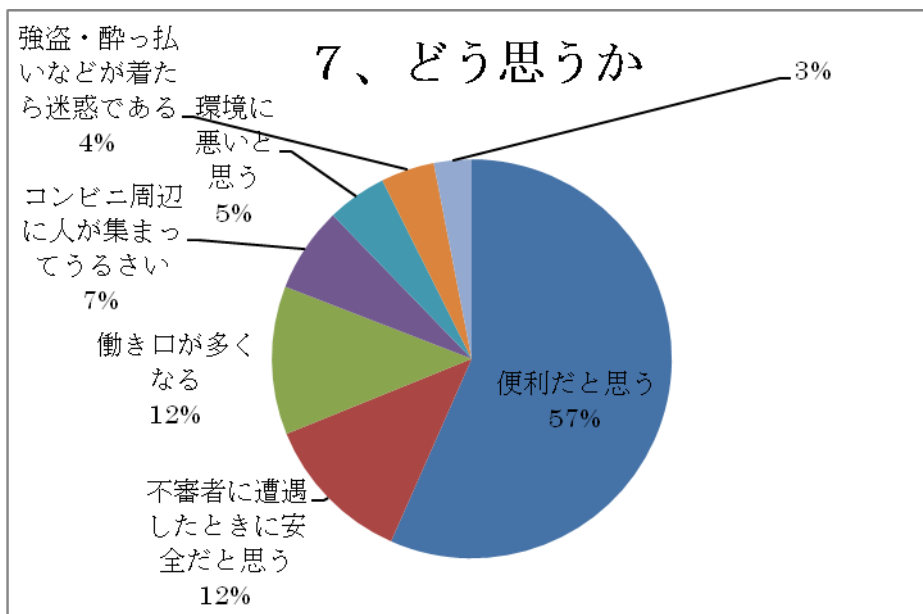


図 9



# WEST 論文研究発表会 2010

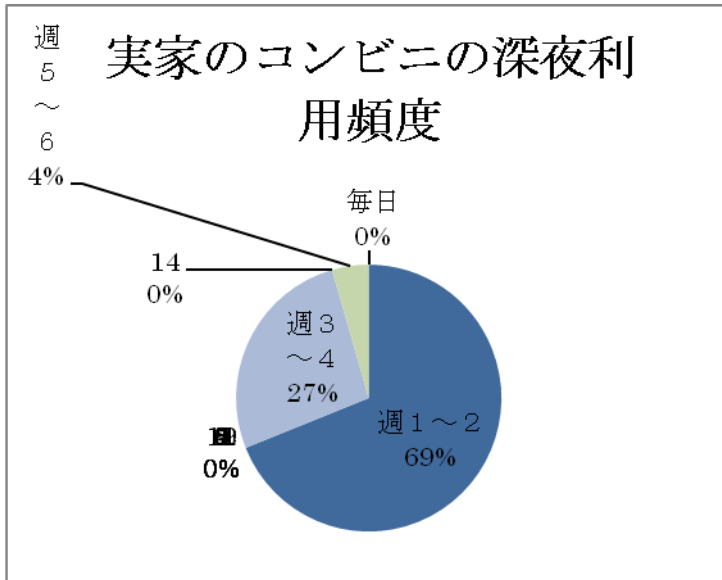


図 10

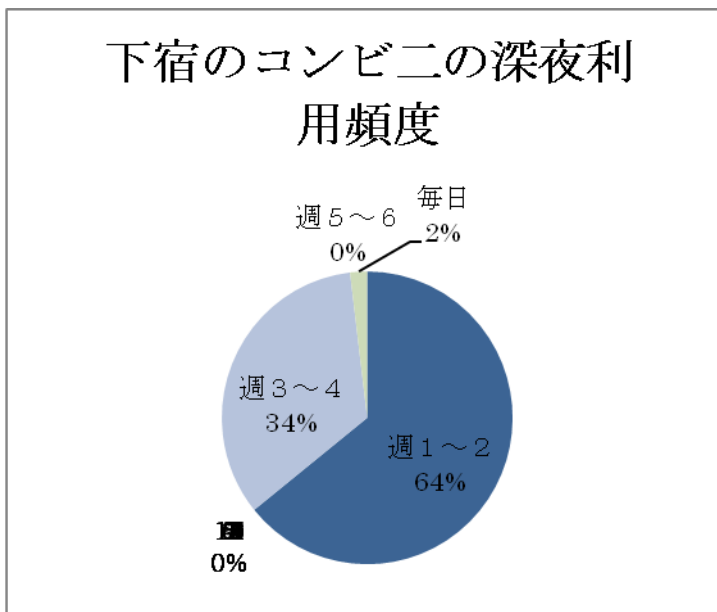


図 11

# WEST 論文研究発表会 2010

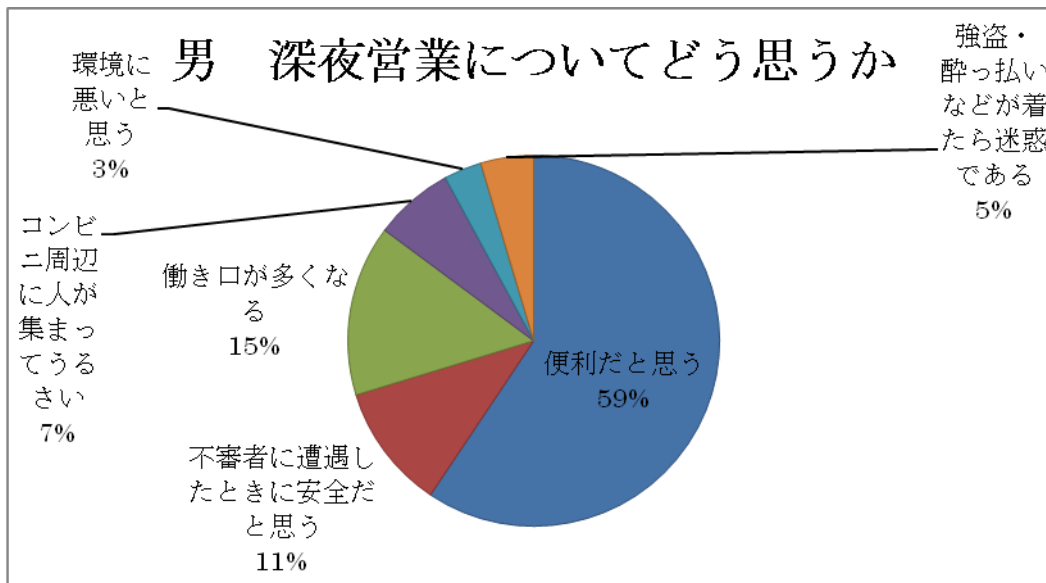


図 12

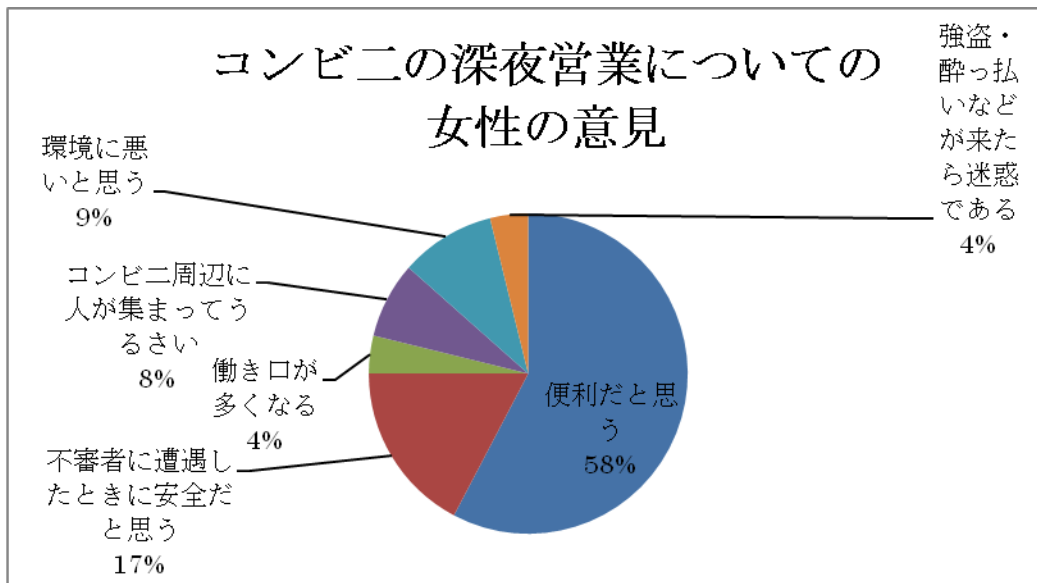


図 13

# WEST 論文研究発表会 2010

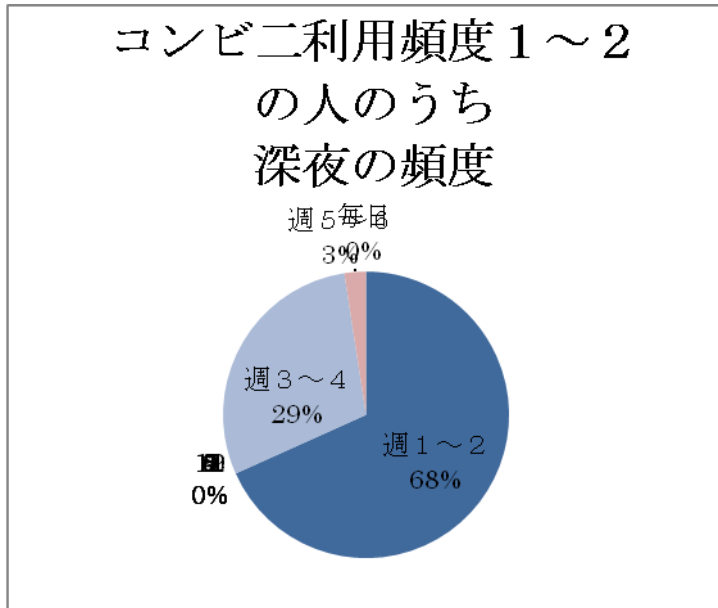


図 14

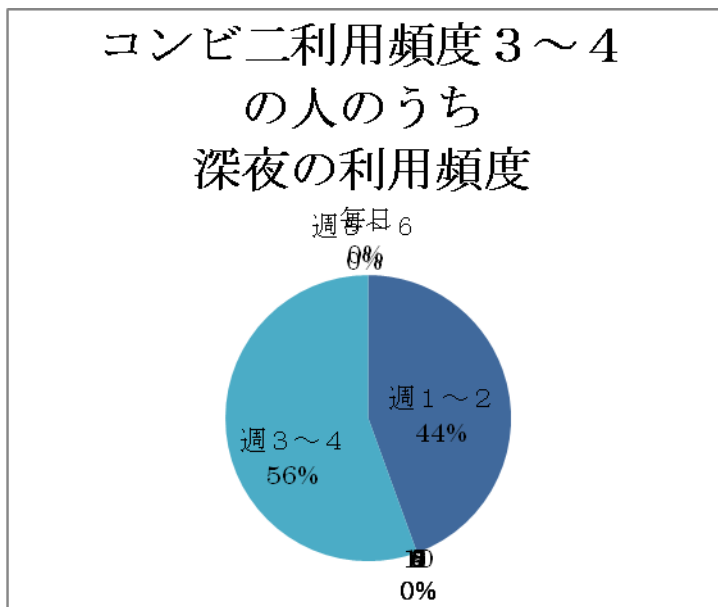


図 15

# WEST 論文研究発表会 2010

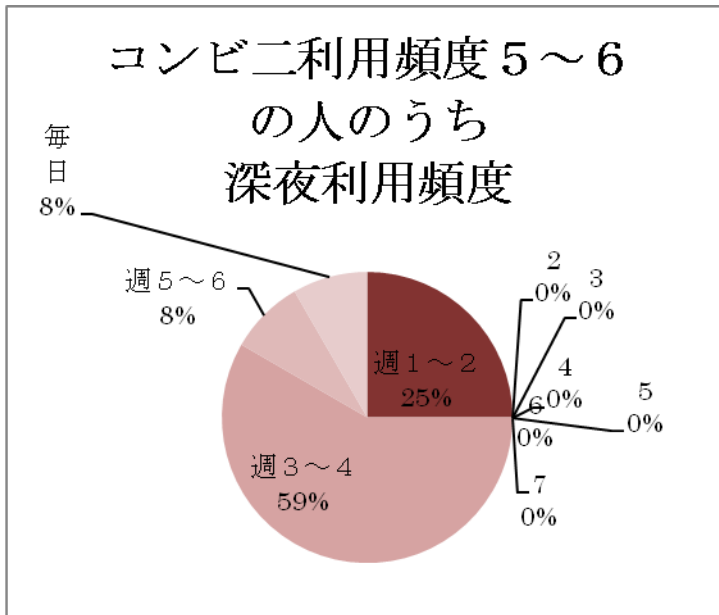


図 16

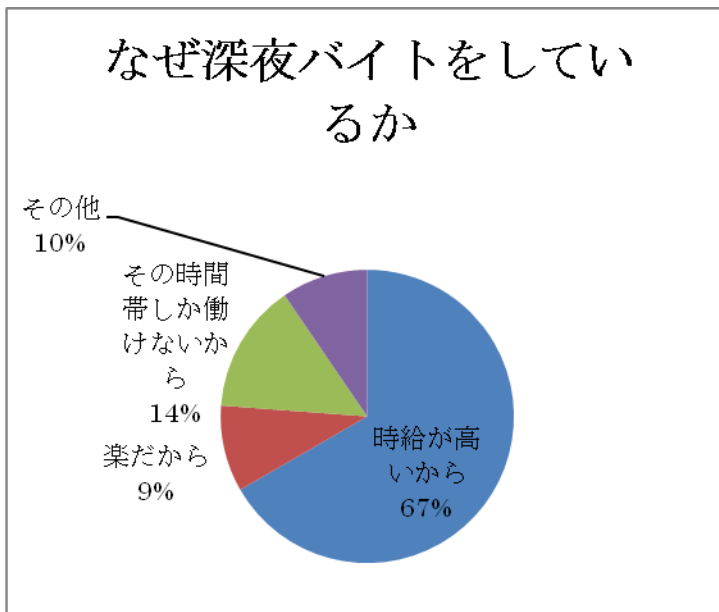


図 17

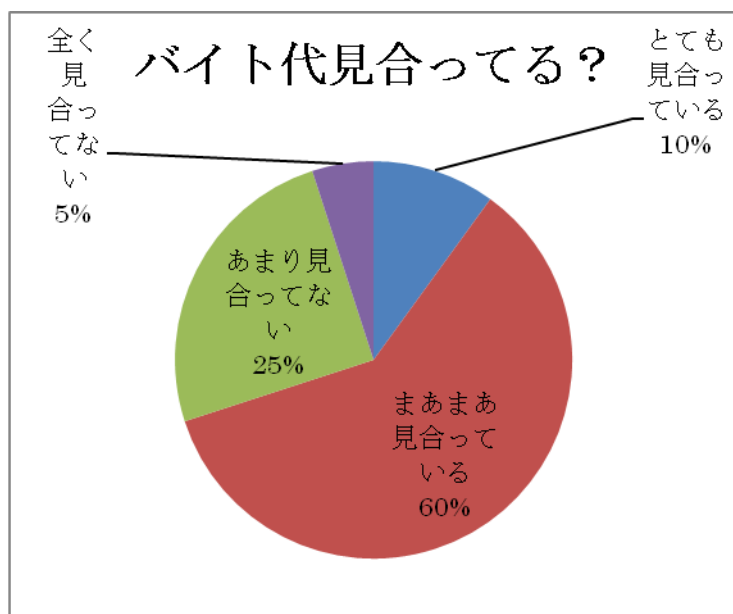


図 18

# WEST 論文研究発表会 2010

## 行ったアンケート

### ～コンビニの深夜営業について～

私たち菅原ゼミは現在 west 論文発表会に提出するために「コンビニの深夜営業の是非について」というテーマで論文を書いており、調査の一環としてアンケートを実施することにしました。ご協力よろしくお願ひします。

- 1、 あなたの性別は？ 男・女
  
- 2、 あなたは実家通いですか？下宿ですか？（寮は下宿に含む） 実家・下宿
  
- 3、 普段コンビニをどのくらい利用しますか。  
・週1～週2 ・週3～週4 ・週5～週6 ・毎日 ・行かない
  
- 4、 主にどの時間帯にコンビニは利用しますか。 （複数可）  
・早朝（6時～9時） ・昼間（9時～17時） ・夕方（17時～22時）  
・深夜（22時～6時）
  
- 5、 4で『深夜』を選んだ方へ。  
深夜の利用頻度は週何日くらいですか？  
・週1～週2 ・週3～週4 ・週5～週6 ・毎日
  
- 6、 深夜コンビニへ行く目的は何ですか。 （複数可 3つまで）  
① 立ち読み ②弁当を買う ③飲みものを買う ④お酒を買う ⑤本類を買う  
⑥ 日用品を買う ⑦お菓子を買う ⑧その他（ ）
  
- 7、 コンビニの深夜営業についてどう思いますか？ （複数可 2つまで）  
① いつでもいけるから便利だと思う  
② 不審者に遭遇したとき逃げ込めるので安全だと感じる。  
③ 働き口が多くなる。  
④ 人が集まるのでうるさい  
⑤ 環境に悪いと思う  
⑥ 変な客が集まる  
⑦ その他（ ）

## WEST 論文研究発表会 2010

8、あなたはコンビニの深夜時間帯（22時以降）バイトをしていますか？

- ・はい → 8-①へ進んでください
- ・いいえ → 8-②へ進んでください

8-①『はい』の方へ。

それはなぜですか？

- 1. 時給が高いから
- 2. 楽だから
- 3. その時間帯しか働けない
- 4. 時給が低いから
- 5. 変な客が多い
- 6. その他 ( )

今のバイト代は仕事に見合っていると思いますか？

- 1. とても見合っている
- 2. まあまあ
- 3. 見合っていない
- 4. とても見合っていない

8-②、『いいえ』の方へ。

コンビニで深夜バイトしたいと思いますか？

- 1. とてもしたい
- 2. まあまあしたい
- 3. したくない
- 4. とてもしたくない

それはなぜですか？

- 1. 時給が高いから
- 2. 楽だから
- 3. その時間帯しか働けない
- 4. 時給が低いから
- 5. 変な客が多い
- 6. 夜は寝たい
- 7. その他 ( )

・最後に、コンビニの深夜営業は必要だと思いますか？

- 1. 必要だと思う
- 2. どちらかという必要だと思う
- 3. どちらかという必要でない
- 4. 必要ない

その理由を教えてください

( )

今後コンビニの深夜営業にどんなサービスがあれば良いですか？

( )

ご協力ありがとうございました。